

「ヤイロの娘」

ルカの福音書 8:40～56

はじめに

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:40 さて、イエスが帰って来られると、群衆は喜んで迎えた。みなイエスを待ちわびていたのである。

今日のメッセージの扱う出来事としては「ヤイロの娘」が中心ですが、本当のタイトルとしては、この初めの一文「イエスが帰って来られると」です。しかしそれはイエシュアが弟子たちとともにゲラサ人の地からガリラヤ湖を舟で渡り、帰って来られたという過去の出来事としてのそれではなく、やがて将来に起こる、イエシュアが王の王、主の主として天からこの地に「帰って来られる」こと、イエシュアの地上再臨の事実を指し示したのものとして読み取り、ここから始まるいくつかの出来事もまたそのように、つまり過去の事実、奇蹟としてではなく、終わりの日にイエシュアが地上再臨されるその日その時、どのようなことが起こるのかという神のご計画がたとえられた、秘められた記述として読み解いてまいります。

まず、イエシュアが帰って来られると「群衆は喜んで迎えた」とあります。ここに使われている「受ける、受け取る」という意味のヘブル語はカーヴァル(קָבַל)は本来、以下のような意味で用いられました。

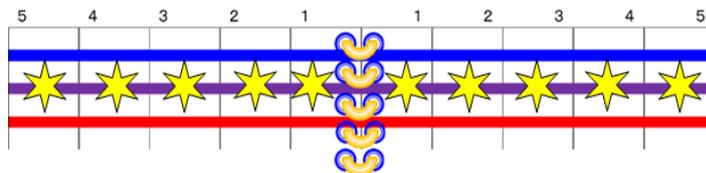
出エジプト記【新改訳 2017】

26:1 幕屋を十枚の幕で造らなければならない。

26:3 五枚の幕を互いにつなぎ合わせ、もう五枚の幕も互いにつなぎ合わせる。

26:5 その一枚の幕に五十個の輪を付け、もう一つにつなぎ合わせた幕の端にも五十個の輪を付け、その輪を互いに向かい合わせにする。

26:6 金の留め金を五十個作り、その留め金で幕を互いにつなぎ合わせ、こうして一つの幕屋にする。



これはモーセの幕屋の聖所と至聖所の天井を覆う幕の作り方を記したのですが、ここで同じ幕を「互いに向かい合わせにする」ようにしてつなぐという意味として、聖書で最初のカーヴァルが使われています。やがて「イエスが帰って来られる」地上再臨されるイエシュアの目的は、地上に一つの神の幕屋、神の家、神の国を建てることです。そしてそれはご自身によってイスラエルと教会をつなぎ合わせ、一つの民、一つの国民とすることなのです。つまり「イエスが帰って来られると、群衆は喜んで迎えた」という記述は、

イエシュアが地上再臨される時、イスラエルと教会はつながり、一つの国民となる、という神のご計画が「型」として表されたものなのです。ですからこれは単なる序文や状況説明などではなく、再臨されるイエシュア・メシア（ハマシアハ）によって建てられる「神の国」メシア王国、千年王国の内実を表した、奥義としての御言葉なのです。これこそまさに「**みな**」が、全被造物が「**待ちわびて**」いる出来事であり（ローマ 8:19）、待ち望むべき「その日」なのです。この事実、このテーマに則して今日の内容に入り、これを読み解いてまいります。どうか聖霊の助けがありますように。

1. ヤイロ

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:41 すると見よ、ヤイロという人がやって来た。この人は会堂司であった。彼はイエスの足もとにひれ伏して、自分の家に来ていただきたいと懇願した。

8:42 彼には十二歳ぐらいの一人娘がいて、死にかけていたのであった。それでイエスが出かけられると、群衆はイエスに押し迫って来た。

イエシュアのみもとに来た「ヤイロ」という人が描かれています。彼の職務であった「**会堂司**」とは、ユダヤ人の宗教的集会場である会堂、今日では一般的にシナゴグと呼ばれる場所の管理責任者のことです。その職務は、会堂の維持管理をするだけでなく、聖書の朗読箇所を選定。礼拝の司会、また聖書朗読者、説教者の指名なども行い、また礼拝の秩序を保つ責任を果すために異端者を追放することもありました。そんなユダヤ人のリーダー的存在である彼がイエシュアに「**懇願した**」とあります。それは彼の「**十二歳ぐらいの一人娘が…死にかけていた**」からでした。これを受けてイエシュアはただちにその娘のもとへ向かわれるという出来事が記されているのですが、これは一体何を表しているのでしょうか。

この「**十二歳**」「**十二**」という数は十二部族からなるイスラエルの民を表しています。その民が死にかけている、つまり滅びの危機に瀕しているという事実がここには秘められているのです。聖書に記されたイスラエルの歴史を見るだけでもそのような出来事は何度も起こっていますが、世の終わりには、これまで以上の、そして今後二度とないほどの規模でそれが起こります（マタイ 24:21）。イスラエルの民が、その首都エルサレムが、黙示録の獣と呼ばれる反キリストの軍勢によって滅亡寸前に追いつめられる「その日」、主はこの軍勢を打ち滅ぼし、イスラエルの民に「**恵みと嘆願の霊**」を注がれると預言されています。

ゼカリヤ書【新改訳 2017】

12:9 その日、わたしはエルサレムに攻めて来るすべての国々を根絶やしにしよう。

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、**恵みと嘆願の霊**を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。

「彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て」とあり、主イエシュアが地上再臨され、イスラエルを救い出し、敵を滅ぼされます。この時イスラエルはイエシュアに向かって、「**恵みと嘆願の霊**」の

注ぎにより、ヤイロのようにイエシュアの足元にひれ伏し「懇願」することになるという事実が、神のご計画が、イエシュアとヤイロについてのこの記述には表されているのです。

ちなみにヤイロ(יֵירוֹ)という名には「光、照らす」という意味のオール(אור)が使われており「主は光を照らされる」という意味があるのです。聖書の時代から今日もなおユダヤ人とも呼ばれるイスラエルの民はイエシュアをメシア、イスラエルの主、王として認めていません。それは彼らの霊的な目に覆いがかかっている、盲目にされているからなのですが、このゼカリヤの預言が成就する「その日」には「恵みと嘆願の霊」が注がれ、彼らの目にまさにヤイロ、主が光を照らされ、かつて自分たちが十字架にかけて殺した「自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て」イエシュアをイスラエルの主、王なるメシアとして見る、認める、仰ぎ見るようになることが、このヤイロという名前からもわかるのです。

今日の内容はこのヤイロとその家についての出来事であり、それは述べたように神の選びの民であるアブラハム、イサク、ヤコブの子孫であるイスラエルについての神のご計画を指し示しています。しかしそこに割り込むかのようにしてイエシュアの御業を受け取ってしまう存在が次に登場します。

2. 長血の女

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:43 そこに、十二年の間、長血をわずらい、医者たちに財産すべてを費やしたのに、だれにも治してもらえなかった女の人がいた。

8:44 彼女はイエスのうしろから近づいて、その衣の房に触れた。すると、ただちに出血が止まった。

8:45 イエスは、「わたしにさわったのは、だれですか」と言われた。みな自分ではないと言ったので、ペテロは、「先生。大勢の人たちが、あなたを囲んで押し合っています」と言った。

8:46 しかし、イエスは言われた。「だれかがわたしにさわりました。わたし自身、自分から力が出て行くのを感じました。」

8:47 彼女は隠しきれないと知って、震えながら進み出て御前にひれ伏し、イエスにさわった理由と、ただちに癒やされた次第を、すべての民の前で話した。

8:48 イエスは彼女に言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」

ヤイロの家に向かわれるイエシュアを引き留め、その癒しの奇蹟に与った「十二年の間、長血をわずらい…だれにも治してもらえなかった女の人」がここに描かれています。イエシュアの目は初めからヤイロの家だけに向いていました。そんなイエシュアから奇蹟をもぎ取ったこの女の人とは誰でしょう、何を指し示しているのでしょうか。冒頭の話からしてそれはもちろん私たち教会です。教会もやがてはイスラエルにつながり一つの民とされるのでこの女性にもまた「十二年の間」という形でイスラエルと同じ数が示されているのです。しかし教会の救いはイスラエルとは異なり、このように、イエシュアがヤイロの家、すなわちイスラエルの家に行かれる前、すなわちイエシュアの地上再臨の前に起こります。そしてその救いがどのようなものであるのかが彼女がイエシュアの「衣の房に触れた」という事実表されています。前回もお伝えしましたが「衣」はベゲド(בגד)と言い、本来は花嫁衣裳、ウェディングドレスを意味する

言葉です（創世記 24:53）。私たち教会はメシアの花嫁とも呼ばれます。そして「房」はカーナーフ(קַנְיָ)で、本来はなんと「翼」という意味の言葉なのです。その最初の言及を見てみましょう。

創世記【新改訳 2017】

1:20 神は仰せられた。「水には生き物が群がれ。鳥は地の上、天の大空を飛べ。」

1:21 神は、海の巨獣と、水に群がりうごめくすべての生き物を種類ごとに、また翼のあるすべての鳥を種類ごとに創造された。神はそれを良しと見られた。

このように「房」カーナーフは本来、「天の大空を飛」ぶための「翼」を意味する言葉なのです。メシアであるイエシュアの花嫁として「翼」のある鳥のように空に舞い上がることによって救われる、この出来事、この奇蹟とは何でしょう、それはこの一つしかありません。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

イエシュアの空中再臨による教会の携挙と呼ばれる上記の預言の成就、それが長血の女の人イエシュアの衣の房に触れて癒されたという出来事には指し示されているのです。これはヘブル語のその本来の意味、最初の言及によらなければ解き明かせない奥義です。この教会に対する神のご計画が、イエシュアがヤイロの家に行かれる前に、すなわちイエシュアがイスラエルの民の上に地上再臨されるよりも先に、まるで割り込むかのように、意表を突くように、突如として起こるのです。

そしてそれはまた、彼女が「震えながら進み出て」来たという事実からも読み解けます。ここに使われている「震える」という意味のハーラド(רָדַד)の最初の言及を見てください。

創世記【新改訳 2017】

27:33 イサクは激しく身震いして言った。「では、いったい、あれはだれだったのか。獲物をしとめて、私のところに持って来たのは、おまえが来る前に、私はみな食べてしまい、彼を祝福してしまった。彼は必ず祝福されるだろう。」

これはイサクの子エサウが受けるはずの祝福をヤコブが奪ったという出来事ですが、「おまえが来る前に、私は…彼を祝福してしまった」という事実を受けてイサクはハーラド「身震いして」います。このように、ハーラドとは本来、祝福すべきものよりも前に他のものを祝福してしまうという事実を指し示しているのです。これはまさにイスラエルよりも先に教会を救うという神のご計画を表したもののなのです。どうか工

サウは異邦人、ヤコブがイスラエルという目に見える事実、既成概念を外して捉えて見てください。なぜなら目に見える現実よりも、（今はまだ）目に見えない神のご計画の方がはるかに重要だからです。

またイエシュアが「わたしにさわったのは、だれですか」と言っておられますが、神であられる主イエシュアがわからないはずがありません。イエシュアはあえてこのように言うことで、かつてイサクがヤコブについて「では、いったい、あれはだれだったのか」と言った上記の出来事、御言葉を指し示しておられるのです。

このように、教会の携挙はイスラエルの救いの成就であるイエシュアの地上再臨に先立ちます。この事実もまたイスラエルの目にはまだ隠されています。上記のイサクがこの時実際に目がよく見えなくなっていたという事実がそれを指し示しています（創世記 27:1）。そして彼の言葉を聞いたエサウは声の限りに激しく泣き叫んだ（創世記 27:34）ともあり、これは先のゼカリヤ 12:10 の預言にあったイスラエルの嘆きに結びついていきます。

このように聖書は、預言はもちろんのこと、実際の出来事、事件さえもまた預言であり、それらはすべて終わりの日に起こる「神の国」へと至るご計画を指し示しているのです。この神のご計画に対する信仰、その成就こそが私たちを完全に癒やし、また完全に救うものです。どうかこの女の人が持っていた癒やしの信仰ではなく、この女の人の信仰の行いに表された、その記述に秘められた神のご計画に対する信仰、携挙に対する信仰を求めてください。長血が、病が癒されただけでは人は救われません。イエシュアは明らかにここに秘められた携挙の信仰を指して「信仰があなたを救った」と、救いについて説いておられるのです。

3. だれにも話さないように

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:49 イエスがまだ話しておられるとき、会堂司の家から人が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすことはありません。」

8:50 これを聞いて、イエスは答えられた。「恐れなくて、ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われます。」

8:51 イエスは家に着いたが、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、そしてその子の父と母のほかは、だれも一緒に入ることをお許しにならなかった。

8:52 人々はみな、少女のために泣き悲しんでいた。しかし、イエスは言われた。「泣かなくてよい。死んだのではなく、眠っているのです。」

8:53 人々は、少女が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。

8:54 しかし、イエスは少女の手を取って叫ばれた。「子よ、起きなさい。」

8:55 すると少女の霊が戻って、少女はただちに起き上がった。それでイエスは、その子に食べ物を与えるように命じられた。

8:56 両親が驚いていると、イエスは、この出来事をだれにも話さないように命じられた。

このように、イエシュアはヤイロの家に来られ、死んでいた彼の娘をただちに生き返らせました。しかしそれは単に一人の死人が生き返った奇蹟というだけではなく、そこには滅亡寸前、いや国としては完全に死んだ、滅亡したイスラエルが、再び建て直される、再興されること、エルサレム神殿と祭司の民イスラエルの回復、すなわちイスラエルの民が神の御子イエシュアをメシアとしてイスラエルの主、王として仰ぎ見るようになることを指す、終わりの日の預言、イエシュアの地上再臨によって成就するその神のご計画の「型」がここにはあるのです。

しかしこれは秘められた奥義であり、だれにでも伝えて良いものでも、また伝えたからといって理解される、信じてもらえるものでもありません。イエシュアはひしめき合うほどに人々が集まっていたにもかかわらず、この出来事を目撃者を最小限に厳選されたという事実それが表されています。ちなみに先ほどの長血を癒された女の人についても同じことが言えます。長血はツアラアトのような皮膚病ではないため、外見ではその症状および癒しの事実は誰にもわかりません。ただ癒された彼女だけがそれを知り、それを見たのです。このように、神の国のご計画はすべて奥義であり、常に秘められたものであり、それが明かされるものは決して多くはありません。

イエシュアは「この出来事をだれにも話さないように命じられ」ました。それは人々が物事のうわべしか見ないことを知っておられるからです（Iサムエル 16:7）。イエシュアがどんな病も癒し、死人さえも生き返らせることができる御方であると知るならば、人は自分もその恩恵に与り、その力を利用することしか考えません。あるいはその珍しい出来事や刺激的、衝撃的な場面を目撃することで感動という快樂を得ようとするだけです。イエシュアはそのような人々には目を留められません。ただ聖書に記されたとおり、アブラハムの子孫であるイスラエルの民とそれにつながるよう選ばれた教会だけを呼んでおられ、「神の国」に迎え入れようと備えておられるのです。

ちなみにヤイロの家に入ることを許された弟子は「ペテロ、ヨハネ、ヤコブ」だけでしたが、この三人はそれぞれ「神の国」に入る王なるイエシュア、イスラエルと教会を表した「型」となっています。ここで注目したいことは「ヨハネ、ヤコブ」の順番です。彼らは実の兄弟でヤコブが兄なのですが、弟のヨハネの方が先に記されています。つまり兄より弟を先に記すことでイスラエルよりも教会が先に救われる、という神のご計画が、こんなところにも隠されているのです。

また同じく家に入った「父と母」つまりヤイロとその妻とは、かつて主がモーセに与えられたイスラエルの「律法」と、そしてエルサレムに建つ「神殿」を表しています。イエシュアは生き返らせた少女に「食べ物を与えるように」と言っておられますが、これはもちろん少女の「父と母」に命じられたものであり、それは「神の国」の民、御国の子らはみなエルサレムからの律法によって、これに聞き従って生きようになることを表しています。まさにこう預言されているとおりです。

イザヤ書【新改訳 2017】

2:3 多くの民族が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を私たちに教えてくださる。私たちはその道筋を進もう。」それは、シオンからみおしえが、エルサレムから主のことばが出るからだ。

このようにして「神の国」は起こされる、建て上げられる、生きるようになるのです。その「型」がイエシュアによって、その御手によって起こされた、生き返らされたヤイロの娘にはたとえられ、表され、奥義として秘められているのです。

どうか今日この解き明かしを聞いている一人ひとりがこの「神の国」に対する信仰、御国を、その王なる主イエシュアを待ち望む思いが与えられ、その信仰が世の終わりまで、だれにも奪われることなく、失うことなく、守られますように。イエシュアの御名によって、アーメン。